

# 藩主たる者

理工学部電子工学科 教授 眞田幸俊 さなだゆきとし

NHKの大河ドラマに「真田丸」が決まった（本稿執筆時）。戦国時代は人と人との関わり合いが先鋭化して現れる。ドラマの中で我が祖先がどのように人心を掌握して激動の時代を生き残ったのか、その描写が楽しみである。

松代藩初代藩主真田信之が酒井忠勝に兵法・軍法を問われたとき、即座に「譜代の臣を不憫に思うことであり、礼儀を乱さないこと」（『名将言行録』）と答えている。組織の運営には部下に心配りをし、同時に己が正しくなければ人は付いてこないということであろう。また「士卒も下知命令ばかりでは励まぬものゆえ、金銀を快く遣わした上での下知命令でなくては合戦にならない」（『名将言行録』）とも言っている。藩主だから、武士だからと権力をふるっているのは家臣・領民の心をつかめず、藩の運営がままならない。実利を与えつつ藩に貢献させることが必要だと、現実的な考えで藩の運営をしていたのだと思われる。藩主たる者について似たような話を地元の方からも聞いたことがある。殿様が風呂に入るときには、どのような湯加減であれ「いい湯だ」と答えたというのだ。「湯加減が悪い」と答えれば係の者が面子を失う。事実かどうか不明であるが、藩をまとめることがいかに日々の積み重ねの賜物かが表れているように思う。現に親類の藩は見栄を張ったつけを領民に課し、重税によって人望を失い、改易の憂き目にあっている。

翻って現代、教育の現場でも、人と人との関わり合いは昔と本質は変わっていないのではないか。人生の先輩として先の見えていない学生に学問の有用性や、グローバルな視点の必要性を説くことは必要と思われる。しかし、明確な「実利」が見えなければ学問や研究に励まぬ学生も残念ながらいる。日頃の学生の指導は、できるだけ説明を明快にし利を説き納得させること、学生に対しては公正に接することを心掛けていくつもりである。ただこれには学生に対して一つ一つの指示に関して細かく説明し、場合によっては自分でも例を示してみせる必要がある。命令ひとつで動いてくれるほど人望があれば楽なのだ。



松代藩真田十万石まつりでの眞田教授。  
眞田教授は松代藩真田家第14代当主でもある

談話室

教員によるエッセイコーナー